

服した。このようなスケールの大きい論文は、他の分野の研究者にも刺激を与えるものであり、オスマン帝国史研究者の将来の目標ともなるものであろう。その点、澤井論文も、フェルナン・ブローデルが課題として残したままの地中海の小麦問題について、オスマン語史料に基づき、オスマン帝国における穀物問題に関わる地中海規模で結論を下すための手掛かりを提供することを試みたものであり、評者にとって本書中、最も興味深い内容であった。

このように本書は専門性の高い本でありながら、オスマン帝国の多様性とその概要を通観する好著となっている。しかし、不満がないわけではない。特に、和訳と用語の使い方、統計分析などに関わり疑問のある論文もあるが、ここでは本書全体の構成について気になった事を3点だけ指摘することにしたい。第一に、本書では澤井論文以外には、地図が一切示されていない。各論文に登場する重要な地名と地域名を記載した地図が、巻末にほしいところである。第二に、オスマン帝国に関わる専門用語などについては、巻末に用語索引があってもよかつただろう。また、そのためには、第三に、訳語やオスマン語の転写表記についても統一する必要があつたのではなかろうか。もちろん、地名と地域名は時期や言語などによって、役職の性質・内容も時期や地域によって異なり、そして、混合言語であるオスマン語の転写にいたってはトルコにおいてさえ統一されていない、といった問題があることは承知している。しかし、今後の課題としてあえて触れておくことにしたい。

最後に、本書に使用されている史料、参照されている研究で使用されている言語に触れてみよう。史料は、オスマン語を中心とした刊行・未刊行の文書史料と、オスマン帝国末期から現在にいたる新聞・雑誌といった定期刊行物を主軸とし、さらにヴェネツィアやフィレンツェに保管されているオスマン語以外の言語で書かれた様々な史料が利用されている。引用されている研究文献の言語も、西欧、東欧、バルカン、コーカサス、西アジアといった、かつてのオスマン帝国領の、或いは帝国と関わりのあつた、国や民族の言語をほとんど網羅せんばかりのものとなっており、さらには中国語までもが含まれている。これらの点からも、読者はまさに、本書の「序」と「あとがき」で鈴木氏が指摘する、日本におけるオスマン史研究の多様化と「研究の間口の広さと奥行き」の実感できるだろう。

参考文献

Baram, U & L. Carroll (ed.) 2000. *A Historical Archaeology of the Ottoman Empire: Breaking New Ground*, New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

鈴木董 2011 『東洋文化 特集 オスマン帝国史の諸問題』 91, pp.197-218.

（今野 毅 北海学園大学経済学部 非常勤講師）

Osman, Ghada. 2011. *A Journey in Islamic Thought: The Life of Fathi Osman*. London: I. B. Tauris. xvii+286 pp.

エジプト最大のイスラーム組織であるムスリム同胞団は、その創設以来、エジプトおよびアラブ世界の最も重要なアクターであり続けてきた。大戦間期から七月革命、1970年代以降のイスラーム復興に至るまで、同胞団の歴史は20世紀のエジプト史と密接に関係しながら展開している。50

年代に政権の弾圧を受けて以降非合法とされ続けたにもかかわらず、政治や社会領域における有数の勢力として民主化運動に貢献し、2012年6月に行われた大統領選挙では遂に同胞団出身者が選出されるに至った。現代イスラーム運動の発展において同胞団が果たした役割は計り知れず、また政治や社会だけでなく、イスラーム思想においても大きな貢献を果たしてきた。

本書は2010年9月に世を去ったエジプト出身のイスラーム思想家、ファトヒー・ウスマーンの評伝である。彼は1940年代から十数年間にわたってムスリム同胞団の一員として活動したが、1950年代後半に思想的転換を遂げ、以降は現代世界におけるイスラームのあり方を模索しながら国際的に幅広い活動を行った。本書は、イスラームおよびアラビア語研究を専門とし、アメリカ・サンディエゴ州立大学に勤めているウスマーンの娘が、父親に対して行ったインタビューを元にして書かれている。

本書は10章から構成されている。第1章は、ウスマーンの生い立ちと当時の時代状況を紹介している。ハサン・バンナーがムスリム同胞団を設立したのと同年にあたる1928年5月に、ウスマーンはミニヤーの中流家庭に生まれた。幼少期の1930年代は、イスラーム復興が盛になるとともに、第二次世界大戦の開戦前後に伴い、イギリスとエジプトの旧宗主国－保護国という関係が大きく揺れ動いた時期でもあった。第2章はムスリム同胞団の拡大過程を述べるとともに、ウスマーンと同胞団の出会いを描いている。彼が育った家庭は特に宗教的というわけではなかったが、1942年に父と姉が相次いで世を去った精神的ショックから立ち直るため、ムスリム青年協会の活動に参加するようになった。青年協会に向かう途中に偶然同胞団の支部に招かれたことを契機に、ウスマーンはバンナーの著作や講演に触れて同胞団への関わりを深めていった。

大学進学に伴いカイロに移って以降、彼が同胞団の青年団員としてどのような活動に携わったかについては第3章で説明される。大学で歴史学を専攻するかたわら、彼はモスクに來た人々や一般聴衆を対象に説法や講義などのダアワ（教宣）活動に従事し、同胞団の発行する機関紙や日刊紙に多数の論考を発表した。

第4章は同胞団最高指導者のバンナーが暗殺された1948年から七月革命直前の1952年までの時期を扱っている。1946年に初の著作『イスラームは貧困と闘う（*al-Islām Yuhārib al-Faqr*）』を出版した後、ウスマーンは社会正義に関する著作も発表した。本章を通じて著者は、彼がバンナー暗殺後に最高指導者に就任したフダイビーと親密な関係を築いたことを述べる一方、彼がフダイビーの指導者としての適性に懐疑を抱いたこと、彼の思想が同胞団の主流から乖離し始めていたことを示唆している。第5章では七月革命以降の同胞団と自由将校団の関係が説明される。当初比較的良好であった両者の関係は、政権のイスラーム化の是非などをめぐって、まもなく悪化した。1954年のナセル暗殺未遂を契機に同胞団は大規模な粛清を受け、ウスマーンも2年間にわたって収監された。

第6章は、ウスマーンが1950年代後半に経験した思想的転回を扱った章である。著者は釈放後の彼がムハンマド・アブドゥフを初めとするイスラーム思想に関心を持っていく過程を説明しながら、同胞団を離れた後に出版された『イスラームの思想と発展（*al-Fikr al-Islāmī wa al-Taṭawwur*）』の内容を論じている。第7・8章では60年代のウスマーンの著述活動、およびアズハル改革への関わりを紹介している。彼はアルジェリアの教育省で広報に従事する誘いを受けて1969年にエジプトを脱し、以降はエジプト国外に活動の場を移した。

第9章は1980年代のイギリスでの活動について説明している。この期間の活動のうち最も際立っているのは、雑誌『アラビア：イスラーム世界レビュー（*Arabia: The Islamic World Review*）』

の主筆を務めたことである。この雑誌は左派や右派、世俗主義的あるいは宗教的といった傾向を問わず、幅広い論考を掲載するものであった。資金難からやがて雑誌は休刊を余儀なくされたが、同誌を通じてウスマーンの名前は開明派の知識人の間で知れ渡った。

第10章は1987年以降のアメリカでの活動を紹介しながら、彼が経験した思想的変遷を総合して論じている。1999年に彼は大著『クルアーンの概念 (*Concepts of the Quran*)』を出版した。これはクルアーンの章句をテーマ別に分類して論じるとともに、8世紀から20世紀までのイスラーム思想家によるクルアーン解釈を盛り込んだものであった。

このように多彩な経歴を持つファトヒー・ウスマーンという人物は、かつて同胞団に所属していたうえに、イスラーム改革派の流れを汲む思想家として位置づけられる。にもかかわらず、これまでほとんど研究がなされていない。そこには従来の同胞団研究がもっぱら組織指導者にのみ着目してきたという背景がある。ウスマーンの思想を把握する上で、本書は格好の入門書となるであろう。

本書はウスマーンの思想的変遷と活動を追った著作であると同時に、彼の目を通した1940年代から60年代までの同胞団史としても成立している。彼が同胞団に関わり始めた1930年代末には、同胞団は既にイスマリーリーヤを中心に活動する慈善的性格の団体から、カイロを本拠地として全国規模の活動を展開する社会・政治組織へと変容していた。特に40年代以降の同胞団は、政治闘争に活動の重点を置くようになっていく。ウスマーンの目を通して本書で描かれるのは、当初は社会全体の包括的なイスラーム化を目指す組織として出発した同胞団が、第二次世界大戦期以降の大衆政治の中で本来の路線から外れ、急進的なイスラーム運動として迷走していく過程である。

ウスマーンは同胞団員時代から、イスラームに基づいた社会正義の実現に大きな関心を抱いていたが、当時の彼がもっとも重視していたのは植民地主義に対する闘争であった。しかし2年間の収監を経た後、同胞団の思想と組織に幻滅したウスマーンは、19世紀のイスラーム思想家であるアブドゥッフの著作や、それと関連したイスラーム法学思想に傾倒していった。彼が61年に出版した『イスラームの思想と発展』は、クルアーンとハディースの柔軟な解釈を主張しつつ、女性の権利や宗教共存について論じた著作である。

ウスマーンの思想的転換を考える上で最も重要な鍵となるのは、同胞団の「特別機関」の存在である。「組織の防衛」を目的として1945年に創設されたこの組織は、最高指導者の直接指揮下に属しておらず、要人暗殺を行うなどの暴走によって最終的に同胞団の粛清を招いた。バンナーの暗殺後最高指導者に就任したフダイビーは穏健派の人物であり、特別機関の存在に反対の立場をとっていたが、実際にはこの組織を統御することができなかった。この時期の同胞団の主流となっていた特別機関に象徴される暴力的なイデオロギーはウスマーンとは相容れないものであり、彼が同胞団から離れる一因となった。

ウスマーンとフダイビー、そして60年代同胞団の思想的イデオログであるサイイド・クトゥブをめぐる関係は、本書の中でも特に興味深い部分のひとつである。ウスマーンにイブン・ハズムら古典期のイスラーム思想を紹介するなど、フダイビーは彼がイスラーム思想への関心を深める上で大きな役割を果たした上に、女性の権利問題などに関してバンナーよりも体系的な思想を持っていた。しかし、著者はウスマーンが同胞団から離れた最も大きな理由として、フダイビーへの失望を挙げている。ナセル体制に対してフダイビーが非妥協的な姿勢を保ったことは、彼が自身の影響力を過大評価する要因となり、結果として同胞団の大規模な粛清を招くことになったとの指摘がなされる。

1950年代に知り合って以降交流を持ちながらも、クトゥブとウスマーンはイスラーム思想家として全く対照的な道をたどった。入団以前は穏健な世俗主義者であったクトゥブは、40年代後半以降の同胞団員としての活動を経て、60年代には過激なイスラーム思想家に変貌していた。本書では、ウスマーンの穏健な思想を含め当時様々な方向性を持っていたイスラーム運動を一掃し、過激な路線へと導いていったのがクトゥブその人であったとの見解が示されている。長期にわたる監獄生活の中でクトゥブが展開したのは、社会をイスラーム的／非イスラーム的の二元論で捉え、非イスラーム的な社会に対する闘争をムスリムの義務として提唱する思想であった。ウスマーンはクトゥブやその弟ムハンマドが主張した「現代のジャーヒリーヤ」論に対して、ムスリムは西洋由来の科学技術だけでなく文化的遺産をも積極的に評価すべきであるとして、明確に反対の意思を示した。その一方でクトゥブは時代状況に応じた啓典解釈を重要視するアブドゥフー門の思想を、宗教の不変性は時代を通じて保たれるべきであるとして否定した。著者はウスマーンの思想と比較してクトゥブの思想が二元論的であったことを示しているが、このような本書のクトゥブ評価に関しては検討の余地がある。

1940年代から60年代の同胞団は、政治闘争の方針をめぐる組織が穏健派と急進派に分極化していく最中にあった。クトゥブの思想が同胞団の思想と同一視されながら広まっていただけでなく、1966年のナセル政権によるクトゥブの処刑は、彼の思想を信奉し武装闘争を行うまでに過激化した「クトゥブ主義者」を生み出した。このような急進的なイデオロギーが力を持った60年代という時代に、ウスマーンが暴力によらない穏健なイスラーム思想を主張したことには大きな意味がある。

著者は、ウスマーンが70年代末に盛んになったジハード団の活動を、同胞団の特別機関やクトゥブが展開したイデオロギーと思想的連続性を持つものとして捉え、ウスマーンがイスラームの本来の原理を論じることでこれらの思潮に抵抗しようとしたことを示している。彼は90年代以降、イスラーム世界の内外を問わず現地のムスリム知識人やイスラーム活動家らとの交流を深めてゆくが、そこでようやくかつての過激なイデオロギーに代わって自らの思想が評価され始めたことを実感している。ウスマーンが後半生で取り組んだ思想的営為は、イスラームの名のもとに展開される暴力的な思想との闘いであった。

ウスマーンの思想の根底にあるのは、社会状況に合わせてイスラームを弾力的に解釈すべきであるという、19世紀に展開されたイスラーム改革思想と共通した姿勢である。また、イスラーム思想家としての彼を特徴付けるのは、キリスト教や西洋文明への関心を強く持ち、常に現代的な問題を取り上げる姿勢を有していた点である。彼は、ムスリムが非ムスリムとの共存のために彼らの宗教について積極的に学ぶことを主張し、自身も福音書を分析した著作を出版している。彼はイスラームとキリスト教の両方が現代的危機に直面していることを指摘し、兄弟宗教として両者の協力が必要であることを訴えた。

著者が位置づけるウスマーンの思想的変遷とは以下の通りである。ウスマーンは1950年代後半以降、イスラームの積極的解釈の可能性やイスラーム国家の寛容性を重視してきた。80年代に彼が関心を持ったのは、ムスリムと非ムスリムの法的平等の実現であった。アメリカに移住して以降は、非イスラーム圏に居住するムスリムの生き方や、西洋のイスラーム理解の向上について積極的に論じた。

90年代から2000年代にかけて、ウスマーンはクルアーンの解釈だけでなく、クルアーンの章句そのものに不変的な要素と可変的な要素が含まれているとの思想を提唱するようになる。彼はイス

ラームへの信仰自体は保ちつつも、イスラーム国家の時代を超えた普遍性を信じていた従来の姿勢と変わって、非宗派的な国家の必要性を訴えるようになった。これは改革派のイスラーム思想家としてはかなりラディカルな姿勢であり、イスラーム世界内部で広く受け容れられうる主張ではない。彼はイスラームの信仰をあくまで個人の内面の問題として捉えており、共同体を体現するような宗教の在り方を念頭に置いていない。故国を離れ、非イスラーム圏で活動するディアスポラ知識人特有の態度がそこに見て取れる。

ウスマーンが80年代に主筆を務めた『アラビア』誌はロンドンを本拠地として刊行され、アメリカから南アジア、北アフリカに至るまで幅広い地域で読まれた。1980年代は、国内情勢や出版体制などの問題などから、西洋を本拠地にしたイスラーム系メディアが勃興した時代であった。これらのメディアは本拠地の利を生かして現代的なテーマを自由に扱うことができた上に、英語を用いたメディア展開は非アラビア語話者のアクセスをも可能にした。ウスマーンが携わった『アラビア』誌の刊行は、80年代以降のメディアのグローバル化やイスラーム復興の世界化を先取りするものであった。

19世紀後半にアラブ世界で盛んになったイスラーム改革運動は、イスラーム世界が西洋に対して遅れをとった原因を、ムスリム社会そのものの墮落に見出した。これらの運動は雑誌などのプリント・メディアを通じてイスラーム世界全体へと広がっていったが、概して知識人層のみを中心とした文化運動に終始しがちであった。その後20世紀初頭に登場したのが、ムスリム同胞団や南アジアのジャマア・イスラーミーに代表される大衆運動であった。

20世紀後半のイスラーム運動と思想を特徴付けるのは、アラブ世界だけでなく南アジアやアフリカを含めたイスラーム世界全体にわたる相互交流的なネットワークが誕生したこと、そして西洋を中心とした非イスラーム圏とも関係が深まっていったことである。非イスラーム圏に居住するムスリムの思想家が登場し、西洋のイスラーム研究者との交流も深まる中でイスラーム思想における国家と宗教の境界は曖昧になりつつある。1970年代以降西洋を意識して国際的活動を展開していったウスマーンはその先駆者として位置づけられる。

さらに20世紀後半から21世紀にかけてのイスラーム思想が直面したのは、国内の強権体制や過度の西洋化といったイスラーム世界内部の諸問題だけでなく、西洋から向けられる偏見や誤解の存在であった。思想家たちはムスリム社会内部に対して現代的なイスラームのあり方を説くだけでなく、国際的に理解を得られる形でそれを発信していくという必要に常に迫られている。2012年にはかつてウスマーンが所属したムスリム同胞団からエジプト大統領が生まれたが、国内外の理解を得ながら自らの思想をどのように社会に対して実現していくかという問題は、現在の同胞団にとっても改めて大きな課題となるだろう。

評者は現代におけるイスラーム国家と非ムスリムの関係に強い関心を抱いてきた。ファトヒー・ウスマーンはこの問題に取り組んできたイスラーム思想家の一人である。宗派間の権利と平等や非宗派的な国家の実現といった彼の思想は、政治的な実現性においては別種の困難を伴う。しかし、そうであるとしても、宗派間の平等を強く意識した彼の思想は、現代世界におけるムスリムと非ムスリムの関係に関してもっとも開明的なものであり、大きな意義を有している。

本書は大戦間期エジプトから9.11後のアメリカに至るまでのウスマーンの生涯を豊かに描き出すことで、彼の柔軟な思想が様々な人物との出会いを経てどのように形成されていったのかを明らかにしている。著者はウスマーンの生涯を平易な文体で簡潔に記述しており、読者は彼の思想の内容と変遷を相対化して理解することができる。その一方で、記述がウスマーンに即しすぎている面

もあって、イスラーム思想の系譜における立ち位置や同時代の思想家たちとの比較に関しては、より広い文脈の中に位置づけられなければならない。

ある思想家について論じる際に、その思想的内実や意義が最も重要な論点となることは疑いをえない。それと同時に、思想が社会生活を送る人間の日常的な営為の中で生み出されるものである以上、それがどのような人物によって、どのような人生の中で生み出されたのかという問題も、その理解のためには同じように重要である。本書は、ウスマーンの人となりや生活に関する肉親ならではの貴重な情報を提供し、それぞれの時勢において彼がどのような思考や感情を抱いたかという点に至るまで細かに記述している。それによって読者は、一人の人間の生涯を通じて紡ぎ出された重みのある思想として、ウスマーンの開明的な思想を捉えることが可能になっている。

(黒田 彩加 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)